



町人袋底拂
上。六





町人囊底拂卷上

人のいふはたれいなりあていませぬ事



めでたう秋ころなりと此聖語久しく耳ふ
ふれどさぞわはしくおかしき事を
とぐりぬき耳順ききふしといふとえ
此身のやとあるはとみねしつと國ゆき
百千は古言もあつと忘れとみねし地して
櫃いをさる珠たまと人を恨みおかしき事
そはふ後の忘れとみねし直なこの一文は衣
乃玉さるあていなりはたの悔と身を

はる人といふをゆゑにわかれぬといふに
家童の袖におゝき失ふやうにわかれぬといふに
むのろいふて世にわかれぬといふに

直の字に此國の言葉はくるふことのまゝかゝる
とぐれといひてわかれぬといふに曲なる
するといひてわかれぬといふに直なる
といひてわかれぬといふに直なる
といひてわかれぬといふに直なる
といひてわかれぬといふに直なる

直い天理なりといふに直い天理なりといふに

吾ゆゑに天理と抱きてなり天理の味
方よ對する欲あるに二徳五常もみな直の
異名なりといふに直なるに萬國の道といふに
質直のといふに直なるに天地日月星辰
の直なるに直なるに直なるに直なる
といふに直なるに直なるに直なるに直なる
といふに直なるに直なるに直なるに直なる
といふに直なるに直なるに直なるに直なる
といふに直なるに直なるに直なるに直なる

欲ふしうも二氣は奪^{うば}て動^{うご}れつらん^わ欺^{あや}ら
いにはおし直さ本^{もと}の曲^{まが}まは枝^えりある世^よならん人
をばゆるすたおのま^ま弘^{ひろ}教^{きやう}と事^{こと}をたれい直さ本
の公^{こう}なるべし

本朝の事に神と教との二つらの外に多くいふに
よければうらやまされんものにはう^う此國は智者ら
此國とのつれ理とをさ^さ結^{むす}ひるのには人のまに
して世は用^{もち}ひうらなものと慮^{おもん}ふ此國の人れをう
うあふさすうはなしてはう^うて世はもつらんふ
もそあそびう^うらあうあう人^{ひと}の國より傳^{つた}え

ありしをいれてもてはう^うも此國水つらんをの
だうれとさう^うはう^うゆい^{ゆい}は人のまにたあ
ぬや^やあすう^うちう^うゆ^ゆあ^あぬ^ぬま^まん^ん屋^やと
たれ神^{かみ}のつらなる人^{ひと}はう^う此國はじま^まれい
すた^たらん人^{ひと}ちう^うい^い此^こや^やま^まあ^あ安^{やす}と^とや^やま^まあ^あ
あ^あら^らぬ^ぬい^いて^ても^もう^うは^はう^うこ^こ一^{いっ}安^{やす}な^なう^うと
い^いま^まを^をま^まの^の本^{もと}の^のあ^あら^らぬ^ぬう^うす^すが^がう^うと^とを^をあ
ら^らひ^ひは^はう^うい^いて^てい^いま^まを^をい^いは^はう^うま^まを^を
や^やま^まの^のう^うこ^こい^いは^はう^うの^のあ^あら^らぬ^ぬう^うと^とを^をあ
異^いや^やう^うめ^めら^らて^てや^やま^まの^のう^うこ^こい^いは^はう^うと^とを^をあ

わづらひまゝこのまを目眩よりこゝろじろくを
あふべしをいさきてきく清くやとらふんと水
土乃裡りふるまゝすゑみく國人の益も多かり
かき詩と又みれし幸いもつとよりつとむ
あれどをのづから今いひやまやとのとぞ
みれしをいさされともろこし人の心よ其國の
風雅のすゑをみて旅をゆくわよのんぐやま
とみし和奇いふよるも詩と此國のすゑふ
はくまされどぬまゝわしれきまといたる此
こころわづらひともろこし人の詩をりた此國を

和國の歌うて吟詠してあきけいあゝことす
しよりばのみらむのこゝろ思ふよりたぬ
とくわろもろこし人の此國よとみれぐまゝけ
子の親の姿みても聖のまゝとみれいよりと
あわろしきまゝは何れをみくわろる姿形い
おのづから思ひこわろるや上よりゆかゝわはれ
もろこし容れをらいつてやまやとみこゝろ
みれどをのづかられやまやとみくわろる其國を
しめれろいとのぬろともふろろとみくわれど
天地のみらむし

のりてこれ聖の教の文字とて曉く吾國の神
のさういふやまや諸ありて文字いふはあり
のりていふものなりとて世にうてより此國の
まじりて人いふ文字のいふは名なり實を
さういふとていふ人なりゆへは名なり實を
みられて此國のいふはやういふやれり
と改ていふといふは名なり實を
まじりていふや我國のやまやとて名實の
素をいふとていふはまじりていふは此身と人
ふはくは素といふは一つなり又萬物第一は

多目とていふの義天地の至尊日の精靈と
の名なり此故に人れ神魂は皆火氣は屬と
りていふても此理ありや日の字はまじりて
のりていふ字なりとて何れは國とて人と
天地の靈とて日輪の德とていふとて
りや人といふを添く大とて人といふを添く
たりとて天地と二つはあはれ相離る事なり
を示し此理とていふて此國の神道と唐の聖
教とと別はありとていふはありぬ
此國のまじりて人をまじりていふ事の始祖いふは

いざか見れ下のきとみと紙とて名付る也
 さい陽音木氣みの陰音水氣なり陰陽の
 神徳ともて國土萬民の父母ともて終ひ
 一切萬物とみと養ふと君と名づく二柱
 乃清神此國草木もて産出と終ひと
 つも廣大仁徳の義とてや此故に神と
 君と二つとも事なり此國の道なり
 とて國家の君なる人此名紙教と終ふと
 是とてやいと

又とわろとし母紙つろとつわぞい香みせ

いづれの色なりかをいふは、
 いづれの色なりかをいふは、
 色に法あり、
 清く濁く、
 るこばい、
 うけつ、
 受ふ、
 と口耳の、
 味と知、
 一體の、

の氣乃凝結キョウケツとていつなり

夫と背セとい婦ツメを妹イモとい唐土の陽と先マて

夫婦とい日本に陰と先マて妹背イモセとい

いあら事ありとい女乃通稱ツウケウとておこり

若ニハといり夫オウと對タイといつれなり背セいす

つらせなりやとていつ女メとていつなり

此コノとい別ワケの道ありて押オシえられぬをいつ

坎水カンスイ離火リカを妹イモとて相對オウタイといつる水ミヅ

火カ乃ノ尅ク制セイとて事ありて火カよりむくが故ユヘ

水火の氣平和ヘイワ得エて萬物を化カ生セイむとこ

女メよりいれ別義ワケギのわづらひよ夫婦和ワぎ家人

とていつとて男オ女メいもせのりやとていつ

よりて知チへ又マタ艮ゲンの卦ケれ義理ギリありて背セめ止トメ

やうとていつなり

兄ケイとていつ兄弟ケイテイとていつ上ウエとていつわふ

通用ツウヨウとて子のうとていつ後ノチとていつ兄ケイとて

男子ナンシといわふ妹イモとていつ此コノ故コト

といわふ妹イモの友トモ語コトなり男子ナンシの子コはとていつ

とい女子ジョシ乃ノこのうとていつ兄ケイとていつ

をとい女子ジョシ乃ノこのうとていつ兄ケイとていつ

子のわらわしといひおしり人といふやうなりおしりを
共つたり十干の陰陽をわけて兄弟とてえと
つて立おのゝ先後強柔なりてかり十干十
二支皆陰陽とわけて先後はよりわらわし
を甲乙といふが如く兄弟の甲乙と助を
寄る兄弟といふ兄の甲にうしろす志といふ
よく是友悌の道をのづから理り知べ
とてや

家の老臣といふ所屋村里の長なる者おかし
といふれり或書より考ふるふ養老年中の此

道君氏首名といふ人なり親後肥後乃守
より此人律令に委く仁政をわけて民を恵み
陂と築き池と鑿教と無く民を富饒し
百姓と子の如くそとて平後親紫の百姓を其
仁徳をあらはし祠堂に建て神とて祭るなり
りや此号親紫より多し郷里乃長は稱を
りおかしきといふ詞も此首名より始まる
はよく親勝の義なり

狂言は此所の目代と名のりて出るなりといふ

かゝる類なるがれうも京都で世の中の人々の
僅く長き事あれい下は乃人々慢る者の
いはいふはうて身れうにまていふるもの
まはまれうるてそおるものあれ教
訓をうかり目代といひいふ一國守地頭
一人は目代と置く百姓とおとり一
人乃村里と仕配といひ其目代乃若くは
屋と号する今村里の長と名をいふがれ
うの國々地頭の目乃代ありて事公行ふ
かといふは至欲意思のあらに者い豊氏の害

とかりて百姓困窮なるものかりうやね
とる處の上乃目代といひは名ふれど氣
まかり目代名をいふがれ外のいほ
めうあふる一高位の人い下は遠くて下官
早役の人れうの下に傲み有る處をいふ
事なけい俳優乃狂言といふやう上は
人々をいふはも一やうがぬちなりや

法師が母といふね言い酔ねと人をいふやうと
いふがれ狐狸といふれう人いふあれて後
諸人いふ一かといふて人いふいふるやう

酒よりほれてねれき一醒そのらん人しや
わどろのふいはよのこゝにて恥ろつろとほ
るものゝめ本心証失するの概裡と酒や
何ぞあるらんほろと酒は酔ふ人とするふ
おのゝ本心の病とわつとちり生得柔和正
直なる氣質の人いものよまぶいあれやす
事わりて酒なるるる氣血うたれようといふ
い蘇るまでうけられぬに寝ていりうとい
獨うふ或の氣質情こつ心は高慢ありて
瞋毒ゆは瞋も毒人酒酔は依る氣血ほそ

勢より心の毒氣かかれし出怒氣傲慢顔色
わつれ何の事なれは罵怒り座席れ人を欲と
し易も時に斂力を授けりしと無禮狼藉た
とゆふものふ一平生の人品威儀温良ふと
し一時はそ失とほふ上戸本性わつれ
い思ふや此故に聖人の佛祖に飲酒を戒め
甚強といふも末代の儒者佛者酒を嗜ま
ざるれとあらねふねき人多くあるも古田乃
は師下戸あるふとこのいふけとといふ色ね
ざらんかのこい玉乃並け座をれちりと書るなり

是て地^ちのすれから作^{つく}りしなりと云ふふりて興^きざ
みせといふなりけりなる事^{こと}紙^しを河^かの人^{ひと}なを
わもづらんがふち偏^{へん}屈^{くつ}なりて僕^われもあんと
して先^{まづ}祭^{まつ}端^{たん}は興^きある神^{かみ}を書^かきり奥^{おく}より又^{また}酒^{さけ}
を名^なにふしうりてふれなり人^{ひと}祭^{まつ}端^{たん}の神^{かみ}と
を執^とりて奥^{おく}より留^{とど}め事^{こと}あり後^ご文^{ぶん}神^{かみ}と文^{ぶん}と
少^すなるび三^{さん}百^{ひゃく}年^{ねん}の末^{まつ}に世^よの後^ご人^{ひと}をさうと
かひさうんとていふなり
人の遍^{あま}いそとるやと事^{こと}あるはうのていりけは
こゝに稀^{まれ}なることなりなるなるなり

わもいひ人^{ひと}事^{こと}も世^よのふりていふなり
くさくさうやうなるなり一^{いつ}家^けの輩^{はい}は
あつていふて後^ごれ禍^{わざはひ}なりとふれは是^{こゝ}に非^ひなり何
うてふ此^{こゝ}にふれとふれなりとふれ人^{ひと}の若^{わか}
き時^{とき}よりふれとふれ聖^{せい}の文^{ぶん}の理^りのつものなりとふれ
なり知^しるなり此^{こゝ}にふれ陰^{いん}陽^{やう}五^ご行^{かう}月^{げつ}日^{にち}の理^りを
かど夢^むの夢^むのなりとふれなりとふれなりとふれ
さふさふ惑^{まど}ひをいふなりとふれなりとふれなり
とふれ人^{ひと}の祈^{いの}を祝^{ゆめ}いなりとふれなりとふれ
かどわいけりていふに情^{じやう}日本^{にっぽん}の神^{かみ}國^{くに}世^よの

呪いといふ諺は世のさるはづゐるものなりと
いはし呪いの主意は氣血を止し血脈を止
る術なり氣血を止るに快くとも呪いの第一
薬は用ふなり次は針とて灸とすとも呪ひ
なり次は按摩とて外より一身をおとすなり又
呼吸とて温め或は息風と吹けて涼め又
唾を繋ぐ痛をいかりけりものさるひみみ見呪
術の根本なり神代は呪ひ止むの法といひ
今の世は祈念呪ひといひわづらひと
せしものいふといふ事功なき中に神代もの

秘事ありなり又さるに世の愚昧のいふ傳に
も多し草木の中にいふ氏家と植ゑるものと
多し此さる人けりいふ酸漿といふの氏家の園に
植ゑるものと福をぬきなりとさるいふこと
なるの中にいふとさるいふ家とありとさる
多し福災ありとさるいふ是は氏家の園に
多しあるはこれいふとさるいふ也但神書の中
には酸漿とわづらひと訓じて素盞雄の亡く
大蛇の目ふさきてわづらひのいふといふなり此草
をいれぬる事あるは家の園に植ゑるは

忘るるなり方々禰福の事なりあつて
柘榴を人あふ棲るなりと忘るるなり此木火災来り
て火災なり此なり人家小植とて新宅後
に乃祝さるは立花なりと事なく其木
客ふとあひたりや思ふる大漢神の師れ坊
はる給ひ師の坊れ靈の妙なりと云ふなり
を思ひて清前なり柘榴の實と噛むなり
戸は吐るを給ひふ火焼く成るなり
といふなり思ふ火災の事とて忘るるなり
今大漢神と信する人一生柘榴實を

喰ふは神明の靈妙なり柘榴而已火焼と
か給ひなり以栗柿何なりと怒りて吐て
かゝるなりとにるなり酒さなりと飯
中が因石物なりとの物を吐いて火焼
来なりなり此神信作なり人又酒を月いと或
飯と食する事なりなり幸ふて柘榴は
こゝろとわたりなりと末代の人なりなり
なりなりけりなりと柘榴は己午の月なり
その色なりなり赤く火の色小同なり己午と火
なり其實なり是赤なりなりなりなりなり

われい実い白きる思はるゝ実あるゝといふく
花白くも実あるゝふ花あるゝの稀なりといふ松榴
是なりはては生のはれりるゝもくらのや
うはくといふれも其精氣火とくは事ありと
ふよりいれ本い花ありといふのちるふ松榴い
このちる石い金氣ちるゝ火い金氣得てゝの
精氣強盛ちるゝといふわれと也いといふ家屋
近く梅の事とくは實なりとて管神のい
いあゝとく

い櫻い實ありといふも八きちるゝのきといふ

實は富はるゝといふいゝ富はるゝの子をた
いゝ八き梅のきい植ふゝ花とくゝといふ
大なるいゝいゝのき院のい植ふゝ花とくゝ
て実なりといふのゝ多くて實なり人けゝ
のちいゝ花とくゝいゝいゝいゝいゝいゝ
地をけゝいゝいゝ土水の氣いゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
是つゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

いふも樹陰草むしのうらなはあて夜高き遠く
飛く啼わくゆきも常の理にわくさうゆり
あたりうてもうこれ人の国東とををたれ我
國の人いさうに賤きやうきとよくうらう成
ゆきも鳥のはひちるぬいさのも愛さばうて愛
ふの郭とねんとうい啼かた深ゆて人の心
蕩うすや清が納言う驚い夜あうぐてぬき
うら春より秋まで啼でうはさう郭い夜
さう夏うのも啼でうさう世あうういさうて
人あうあう東あううかやう郭とね事あう

予れもう郭い陰氣の鳥うて柔弱情慢の物
うやれのまこぬきう得ど驚の巢あうい府
ゆて驚きあううやういさう常の理にわく
さうものうあううさう蜀帝れ魂魄といさう
とあやさ事あううさうてあううむ哀然あう
天地よあまははあう人いわり地震洪水大風い天
氣大過り運動萬物の抗氣と制して平氣あ
帰あうの何より雷い萬物の榮枯と催し促し
地震い土中陽氣い大過を洩し洪水い万物
乃燥氣を潤し困濁の氣を洗ふ大風い暑

書經高宗彤日小天監下民典厥義降年有
 永有丕承非天^{ミナカミ}又^{ミナカミ}民^{タタ}民^{タタ}中^{ナカ}絶^ツ命^ツとつる此句
 人事一切の要諦めて一身を養はば依て壽の
 長短正命非命わける悟明とて
 楚辭^ソは善い外よりあるに名い虚しくあつて
 孰^タう施^{ホトコ}あつて報^{ムカ}ひわらん孰^タう不^フ實^{ミンラ}とて獲^カ束
 わらんといふある人世の惑ひ解^{トク}は使^ハわける楚辭
 詩^シ小弁^{コベン}に君子^{コノリ}无^ム易^{ヤスクモチユル}由^ユ言^{コトフ}耳^{ミミ}屬^{ツク}干^{ツク}垣^{ツク}とつる和
 俗^{ソク}乃^ノ諺^{コトワザ}は壁^{カキ}小耳^{コミミ}ありとい此句よりあるに君子
 のふわいふ人ありといふくつるものといふと

つるといふ一言ふ身とわけるはききといふ
 今甚多うとてや

家語^{ケゴ}は老子^コに云く夫^レ説^セ者^ハ流^シ於^ニ辯^ニ聽^ニ者^ハ乱^ル於^ニ辯^ニ辭^ニ
 如此^{コノ}二者^ニ則^ハ不^レ可^ク以^テ忘^ルとつる世の議論説法
 儒佛の偏多し皆辯は説法乃勝負ありて
 道德の勝負はわいをさ(ま)事也市高
 のきくといふ利と争ひ勝負とゆがめ
 同く云れ子のむく云聲^セ之^ノ樂^{ガク}吾^ガ躬^{ミミ}之^ノ禮^レ吾^ガ
 服^ヘ之^ノ喪^モ此^レ之^ノ謂^フ云^ハ云^ハとつる此語實^ニ了^ル孔子
 の語よりいふと教^ノ人ありとて禮儀をわい

るる亦又安んて思ふなりととる人の善道と
事^{こと}寡^{くわ}さるるに孤陋^{ころう}と云ふ文筆^{ぶんぷ}を以て
をうていわけ意乃固^こ遍野^{へんや}甲^がなるは
なり

史記^{しき}小樊^{せうはん}噲^{かい}曰^い大行^{たいかう}ハ不顧^{ふこ}細謹^{さいきん}大禮^{たいらい}ハ不辭^{ふじ}
小讓^{せうじやう}とあり學者吾^{われ}行^{かう}乃憚^{おそれ}る事あり付^つ
已^{おのれ}が非^ひとする事あり此語^{このこと}と證^{しるし}と今
の世^{このよ}乃學者何^{なん}ぞの大行^{たいかう}大禮^{たいらい}ある樊噲^{はんかい}が
大行^{たいかう}大禮^{たいらい}といふは天下^{てんか}公持^{こうぢ}つた志^しを以て
あるをたよけて漢^{かん}を興^{おこ}起^{おこ}とるは人行^{かうじん}大禮^{たいらい}の

ありたりと今^{いま}人乃大行^{たいかう}大禮^{たいらい}といふは
同項羽^{どうけうよく}のまはい富貴^{ふき}ありて不^ふ歸^き故郷^{こきやう}ハ如衣^{じふい}繡^{しう}夜^や
行^{かう}誰^{たれ}ぞ知^し之^{これ}といふ後^{のち}世人^{このよの人}乃口實^{くちじつ}とする句^{こと}あり
るの主意^{しゆい}ふことあり實^{じつ}の君子^{くんし}あり富貴^{ふき}ふ
して故郷^{こきやう}より親族^{しんぞく}のまは公惠^{こうゑ}と郷人^{きやうじん}乃舊^{ふる}
恩^{おん}を謝^{あが}し孤獨^{こどく}に恤^{あは}れざるありの主意^{しゆい}なり
御黨^{ごたう}の人は親^{しん}し至^{いた}禮教^{らいきやう}情^{じやう}の輩^{はい}と畏^{おそ}伏^ふて
と欲^ほして故郷^{こきやう}に帰^{かへ}るは小人^{せうじん}の主意^{しゆい}なりといふ
朱買臣^{しゆかいしん}が語^{こと}するあり項羽^{けうよく}と賈臣^{けあしん}の意^いは知^しる
同秦^{しん}本紀^{ほんき}より前事^{ぜんじ}之不忘^{をわす}後事^{ごじ}之師^し也^{なり}といふ

又漢書賈誼傳云前車覆後車誡也同
意此句者乃學者乃歷史と云は皆此句に意
ま子春秋乃作又思此教誨に終るなり
董仲舒曰正其義不謀其利明其道不計其功
此句以て仲舒の真儒たる事明るなり其言
者必益あり其語ありまゝと云ふ又清獻公乃
語行好事莫問前程と云ふ同意なりと好
事は天理なり

易乾文言小同聲相應同氣相求水流濕火就燥
雲從龍風從虎聖人作而萬物覩とあり此語

を以てるる附は萬物の氣の如く類を以て相感
と惡人よは惡氣應一善人よは善氣應と一念
之善は景星慶雲一念之惡は烈風疾雨といふ寔
小禍福は是つゝ招くは理なりと云ふ
同坤文言小積善之家必有余慶積不善之家必
有余殃といふ是善惡相感一禍福自ら招る
證文畏ふは是れ聖訓なり但佛家の因果之義
と其解異なる處あり輕重に看過と云ふ以
同云く君子敬以直内義以方外敬義立而德
不孤といふ内外の字初學誤る事なりれや宿

儒の説と國里内外の文字小泥むるあは
告子義外乃説又他よりあへりしを

同謙乃家より天道虧盈而益謙地道變盈而
流謙鬼神害盈而福謙是聖人の訓戒受ふ
されりや書大禹謨めと満招損謙受益時
乃天道也云又豊乃卦れ言小日中則昃月盈
則食天地盈虚與時消息而況於人乎況於
鬼神乎とつる天地乃盈虚より鬼神も適る
まかり況や人なるふゆめをや元龍有悔い
くんや萬物もゆめをや

同解乃六二は負且乘致寇至貞吝世間の萬事
みまのく相殺く不相應くわけて時く而位と
ふ叶い應とるに金く又相應は背さるるハ
とるなりて久しんく歎といふはゆめを
よむりて身を失ふをいふ也是事より貪りて
富れが真似し賤より人の責めがゆめをいふて
余のゆめいそ奴婢が車にまはるはゆめし賤
後て財寶ありやゆめい見殺し奪はんは
終り寇のゆめいゆめい僅は謹む事ありと
ゆめいゆめいゆめいゆめいゆめい

程子三不幸とのべし諸少年にて高科に登
ふといふ不幸なり又兄の勢い、席て美官と
なるその不幸なり高才ありて文章と能く
これ不幸ありといふ識り有るは識あり
今世の学者朱子程子に信仰ありけ
諸とい用ひて子弟と教ゆふみ此戒訓
能くといまふ小学のよひなる詩文と
事と專要とすいつなる故なり初学乃志
之は唯名と求りて人な勝むとわらふ
まばかり

儒者ふはあり腐儒卑儒曲儒浪儒鞭賈
秋儒顯枉儒迂儒霸儒逸儒雅儒真儒
馮貞白の實言ふるなり又此外又儒雅儒俗
儒枉儒賊儒といふありとみ

醫者ふはありありとるて莊隱居軒岐救
正論より儒醫明醫德醫あり隱醫世
醫僧醫あり名醫時醫流醫あり女醫好醫
淫醫瘍醫あり又數醫といふ和俗の誤るや
野巫醫なりとや呪い加持法まて病と療
とふといふ

司馬溫公の六悔銘あり富時不謙貧時悔醉裏
狂言醒後悔官行私曲去時悔健時不藥病時
悔幼而不習老後悔聽時不學過后悔常小
座壁小記と毎日拜する人さるものなり
類經攝生の語と與天和者樂天之時與人
和者樂人之俗とあり人生修養の助あり語也
淮南子小神越者其言華德蕩者其行僞又
曰人無言而神有言者則傷念慮不得卧
止念慮則有為と程主意あり
素問善言始者必會於終善言近者必知其

遠道公説人乃知わん句なりや
史記老子の曰聡明深察わて近死者好んて
人と議する者也博辯廣大わて危其身者
人の惡公衆く者なり為人子者母以有己
人乃臣とていひく己と有るは母は孔子
の世家小出より此句老子の孔子の教訓道
徳ありとみる何ぞ此句は孔子の門人より語
録に六經より出づる事はいふやうなり
わんさ所あり

張氏正義は我を以て粒と視ふ時に則我人也

道はありて物我は體とるなり則道大なり
故に君子は大方の道と大に我と大なる
者、狂と免れざる一とて、今何儒佛の
學者のいふにあらざるや

皇極經世書、小人の神明、則天地の神明あり
人の心より歟、天地と歟、なり不愼哉と
いつり又禮記の禮運、人者天地之心也といふ
は、同主意あるふ似たり、但禮記の句意は
仁と主とてなり

書の泰誓、小天地の萬物之父母、惟人の萬物之
靈といふのみ、上の語句と一意
詩の蕩之篇、靡不有初、鮮克有終といふ、戒

りその毎にせれ有とありぬなり
同瞻卬之篇、小哲、成城、哲婦、傾城、婦、有長舌
維厲之階なりといふ、女人の柔才なる戒め
より傾城の二字、是より初より傾城といふ都て
女といふを、遊女の如く、あはれ今の花女
は、古人に戒しむるを、又牧誓ふ
女人の多言、牝雞の晨鳴ふなり、戒めり
書の多方、小惟聖と、罔念狂とあり、惟狂と克

念へい作聖といふ事をして不思といふ思
て不学といふ危といふ事又おれ
同周官小作德心逸して日休作偽心勞して
日小徳といふ事誠慎といふ徳なりや
同秦誓小責人斯無難惟受責俾如流是惟
難哉又云く佐々勇主射御不違我尚不欲
とつり初の語に己が智小慢といふ事
乃向い勇小伐人人を戒めり受責如流といふ
諫順い過を改る事流水の速く去て還
らざるごとくに胸臆い過を停じり事なき

孤太夫まといふ一佐とて武篇とてなるい實
乃太夫あづけといふ事なり

素問小善く天賦言のい必人よ慈と善く者と
つ者い必今小験じといふ此句深意あり
人々天と同一の理あり天地の化と論といふ
これい氣が主として理其中にあり人を論する
河の理とまゝして氣其命と徳といふ天地の間
盈虚の皆一元氣也氣乃外又別小元亨利貞
を思ふといふ事いふ人なるい精神
作用皆氣にて其間小主宰とて居る也

ありあけものい理なり此なる理氣人は在てい
二つあれたるわつと見と一つふよるはわく天地
ハ無んあて人の欲あつていなりや大儒乃
論なり

又選よ氏田不進履李下不正冠と學者より
益あつてさ語なり又曰本秀於林風必推行
高於人衆必誅是學者の心得べき句なり
四不闕乃語い誰人やらん忘れり不與命闕不
與法闕不與勢闕不與理闕とさ
四不欠の語なり春寒秋暑老健君寵皆是又

一わづらへて愛と人乃刻へなり

處窮四味あり無事以當貴早寢以當富安
歩以當車晚食以當肉とさ貪ふ處する
乃教めて富人に敬とさ句なり

居郷四幼あり徳業相勸過失相規禮俗相
交患難相恤此の孫防が四休あり仍四休居
士く早以麗茶浴飯飽即休補破遮寒暖
即休三平二滿過即休不貪不妬老即休
是又日用あつてやうの訓戒なり三平二
満ハ妻乃嬌とさ三平ハ額とあふ煩乃

平らふて面乃るあくまはつゝ二満の腹と
胸くわく大なる也つゝもて悪女といふ
妻の衣食の當りけりあつてゐるもの
あつて飢寒を以て恥をてゐるやうに悪女
あつて同一とわり嬖女といふ我れ執着乃貪
りあつて又他人の恥とて妬み多く心裏常
小静ふてよろけよ貪妬あつて老期安樂
なるの公殊勝の境界なり

道德の人といつておのふおのの身軀の穢は
しきぬらあつて全恥るをせむを

殊勝の修なりとて凡俗の人といふも情欲
を離る事あつてゆるゆる恥るあつて恥脱り
とて稱とて又唐土の事いふは日本乃風
俗禮はよ貴人より土民よむあつておの
身體乃陰恥あつて人乃同く觸志
ゆる事あつて人との禮はよ是人間と
のほくは誠情なりといふや聖人佛も凡
夫衆生も貴人乞丐も身體乃穢物にみ
あつてききぬれ見ぬれあつてといふ人の眼は
觸志あつて且つ恥とけがごとくその自然れ

人情なり此人情ふはるきそやいふくそ人を
有のまゝいふといふ一なる公見識とて人
情と欺さるるやうくさるるやういふ人の
目紙けがを事なり曲のなり義ふわに禮母
わに孝子に父母の唾漬とてあつた自然の
誠情なりいふや身は陰而をたま人の眼は
神明の榮精とてま體乃るまたり下品の私
様は近づき觸れむに求るく人の陰様と
窺ひらるる何いおのう身體乃神氣にけりす乃
衆なり又そのまが陰様とてさるる人なりを

あひつゝ人を様との罪非禮の甚き者也此なり
社系れ或は路次やわを様物とて一目とるに
是非あけといひ憚はといふたるうあつてこひ
みる何い様と受て神前や様なりやむ社道
乃戒律なる候なり佛はてし此戒なりや
は華經安樂の品の中に僧徒乃女人は對て法
を説事あるふやのまが陰なりわに肌なり
と女人ふもあひる事なりといふ何いといふや
身の陰なり穢物をや見しそ様なりわにわに
あひつゝ儒佛神の禮は背くる事と知べし



